
アイシテル

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイシテル

【Nコード】

N4610E

【作者名】

松の慎

【あらすじ】

イギリスと日本。なぜ自分は日本人で、彼はイギリス人なんだろう。なぜ日本は日本語で、イギリスは英語なんだろう。叶うことのない恋、一生に一度の恋でした。……悲しい過去を持ったイギリス人を愛した日本人の少女、2人は結ばれない運命だった…

初夏が訪れた頃

最高に切ない恋をしました…

「ジョーンツ」

「あー？ なんだよ、美園」

暑い日差しが照りつける。

ジョンは木陰で寝そべって今日もまた授業をサボる。

あたしはこうやっていつも迎えにきているからいつの間にか、クラスメートにジョン係と命名されてしまった。

「もうっ、まあたサボってるんだから」
「いーじゃん、別に」

あたしが隣に座ると、ジョンも体を起こす。

髪の毛についた芝を取るため、フルフルを頭を振るジョンがなんだか可愛くて笑っていると、ジョンは「笑うなよー」とムツとする。

「美園も真面目だなー」

「なに言ってるの。ジョンのためにやってるんだから」

「はいはい、ありがとーごぜーやす」

ニヒッと笑顔を見せる君が好き。

髪の毛はブロンド。

瞳はブルー。

正真正銘イギリス人のジョンは、2年前から日本に来ているらしくて日本語がペラペラだ。

今お互い高校3年だけど、ジョンは今年この学校に転入してきた。

当時はほんと大騒ぎ。

日本語ペラペラのイギリス人がいるってキャーキャー騒がれてた。

なのに女子に媚びない態度を取るため、男子たちからカッコ良いと評判になり、男女ともにジョンのことが大好き。

今ではもう人気者。

「さ、授業戻ろっか」

あたしがそう言うのと、ジョンはめんどくさそうに立ち上がり、でもしっかりとあたしのあとをついてくる。

たわいもない話をしながら教室へ戻ると、もうとっくに数学の授業が始まっていて、教室のドアを開けると一斉に注目をあびる。

みんな「やっと来たかー」といつものことのように笑い、教師までもが「偉いじゃないか、ちゃんと来て」というほど。

席につくなりジョンはウォークマンを取り出し音楽を聴き始める。

なんでこんなに優遇されているかって？

それはジョンが我が校始まって以来の天才だからだ。

こっちに来る前は、今すぐにもケンブリッジ大学に入れるほどの頭脳を持っていたと聞く。

そんな人なのだからこんな名もない学校の授業なんてクソみたいなものなんだろうとみんな納得している。

だからジョンは外で寝てるか、教室で寝てるか音楽を聞いているか

のどれか。

時折ボーッと窓の外を眺めては切なげな顔もする。

自分があてられればちゃんと答えるから教師も文句は言わない。

「…ねえ、ねえジョン」

4月、みんなに囲まれてるジョンを遠くから眺めた。

ジョンはめんどくさそうな顔をしてようやくその場から抜け出し、遠くから見ていたあたしと目が合ったけど、他人に無関心なジョンはあたしから目を反らした。

5月、普段は男女別で体育をやるけど、雨が降ったためサッカーをやるはずの男子が女子と同じくバドミントンをやることになり、遊びでミクスドやることになり偶然にもあたしはジョンとペアになった。

『名前なに?』

『え?』

『名前』

そっけないジョンに最初はビクビクした。

『あ…美園』

『ミソノね』

けどジョンはあたしの名前を呼んでニコツと笑った。

『ジョンで良いんだよね？』

『おう』

身長が高くてリーチがあるジョンのスマッシュは鋭角すぎて誰も拾えない。

逆にあたしは相手の次の手を読むのが得意でどんな球も返す。

あたしたちに適うペアはいなかった。

『やった！1位だよ、ジョン！ナイスッ！！』

あたしがスツと右手を掲げると、ジョンは『だな！』と笑顔であたしの手をパンツと叩いた。

それからだった。

ジョンと仲良くなったのは。

…すぐに大好きになった。

これほどまでに人を好きになったのは初めてだった。

ジョンがいない日は泣きたくなるほど寂しくて

ジョンと笑ってられる時間は胸が張り裂けそうなほど嬉しい。

中学のときの彼氏に抱いた感情よりも、もっともっと大きい。

アイシテル

「んー？」

あたしが話しかけると、ジョンはイヤホンを耳から外す。

「ジョンはさ、大学も日本？」

「決めてない」

「じゃあイギリスに帰っちゃうかもしれないの？」

「…イギリスには帰りたくない」

帰りたくない？

妙な言葉のニュアンスが気になり、聞き返すとジョンは「間違えた、帰らないの間違い。日本語って難しいのな」とハハハと笑った。

嘘ばかり。

日本人より日本語上手なくせにこの期に及んでそんな間違いをするものか。

けど、言いたくないものを無理に言わせたくもなかったから流した。

「美園はなにになりたいの？」

「あたしはフライトアテンダントかな」

「へえ。なんで？」

「なんでって…」

だって、もしジョンが帰っちゃったときイギリスへ行く機会があったらもしかしたら会えるかもしれないから…

なんて、そんなこと言えない。

言えるわけがない。

「やっぱ世界中を回ってみたいもん。ジョンは？」

「俺はとくにないな」

「ええ？ そうなのー？ もったいなあい、ジョンならなんだってなれるのに」

あたしがそう言うのと、ジョンは髪の毛をくしゃつとする。

あ、また…

時折見せるあの切ない顔。

「俺はそこらへんブラブラして特に定職つかないで遊んでるかもない」

「ニート？」

「はは。まあ生きてればなんでも良い」

「あはは、なにそれえ」

笑ってるその顔は、本音？

冗談のように言っているその言葉は、本当は本心？

時々ジョンが分からない。

なにを思っ、なにを考えているのか。

ジョンはなんで日本に来たかも教えてくれない。

聞いてもいつも適当な答えを言うか、はぐらかされるかのどっちか。

イギリスでなにがあったのか。

こんなにも仲良くなったって
あたし、ジョンのことなにも知らないの。

一番大事なことを知らないの…

「……………!!」

放課後、委員会が終わってほとんど誰もいない校舎を歩いていると、
大声が聞こえた。

なにかと思って近づいてみると、ジョンだった。

話しかけようと思ったらなにやら電話をしている様子で、しばらく
待ってることにした。

「You also know that, don't you
?! Never come back again!」
『……!』
「Impossible!! Leave me alone
!!!」

ジョンは大声で怒鳴りつけ、電話をブチッと切った。
そして携帯をバンとカバンに打ち付ける。

「Shit……」

夕暮れがジョンを照らす。

悔しそうで切なそうで辛そうなジョンが赤く染まり、あたしはそれをただただジッと見ている。

数分経った頃、ジョンがあたしに気づいた。

「みっ、美園?!」

「はい、ジョン」

「いつからそこに……」

「お前も知ってるだろ?! 俺は戻らない……ってところから」

あたしがそう言うのと、ジョンはハア…とため息をついた。

そしてカバンを持ち、スタスタと歩き始めてあたしの横を素通りする。

「まっ…待って！待って、ジョン！！」

これ見よがしに叫ぶ。

このまま放っておいたらジョンがあたしから離れてしまいそうだった。

なんとかしてつなぎとめておきたかった。

ジョンはあたしのことをなんとも思っていないとも…

「あたし…ジョンの悩み聞くよ！」

「なに言って…」

「ジョン辛いんでしょう？！いつもそうやって切なそうな顔する！あたしで良かったら協力するから！」

大声でしゃべったせいか、はあはあと息が切れる。

ジョンは少し間を開けて、そして再びあたしのほうへと近づいた。

「ジョン…」

ジョンはカバンをおろして、どっかりと椅子に座る。

そして、お祈りするかのようには手を組み、顔をうつむかせた。

「…イギリスにいた頃、好きな人がいた。その子は親の都合でイギリスに来た…日本人だった」

おもむろに明かされるジョンの過去。

あたしも椅子に腰を下ろして話に耳を傾ける。

「イギリスに来て間もない彼女はまったく英語が話せなかった。それでも話そうと努力はしていた」

「…」

「あの日…彼女が横断歩道の向こう側にいるのが見えた。俺が手を振ると彼女も気づいて手を降った」

ジョンは震える小さな声で話し始める。

ジョンが手を振ったと同時に横断歩道の信号が青になった。

彼女は手を振りながら歩き始める。

そのとき信号無視の車が走ってくるのが見えた。

けど彼女はイヤホンを付けていたため車が向かってくる音は聞こえ

ない。

ジョンは大きな声で叫んだ。

STOP!!と。

2回目の声に彼女は気づきイヤホンを外した。

もう一度ジョンがSTOPと言うと、笑いながら彼女は小走りし始めた。

ジョンは彼女を助けるために飛び出したけど、間に合わなく、そのまま彼女は車にひかれた。

『ジョン……』

『大丈夫か?! 誰か救急車をつ……!!!!』

ジョンは周りにいた人たちに求めた。

誰かが救急車に連絡を取るのを確認したあと、ジョンは彼女の手を握る。

死ぬな、死ぬなと。

『なんでっ……なんで走ったんだよ……』

『ごめ……でもジョン、SKIPって……』

苦しそうに血を吐きながら彼女はそう言った。

ジョンの「STOP」を「SKIP」と聞き間違えたそうだ。

救急車が来て彼女は運ばれ手術を受けたけれど、亡くなった。

ジョンは彼女の親に何度も詫びたという。

発音の聞き取りが出来なかったばかりに亡くしてしまった娘に、彼女の両親は言葉がなかった。

ジョンを責めることもしなかった。

イギリスと日本

せめて彼女がもっと長くイギリスにいて英語が出来たなら、こんな事故は起きなかった…と、ジョンは泣きそうな声で訴えた。

「国が…言葉が違うせいで……」

当時のジョンに日本語が話せたなら…

ううん、せめて彼女が英語を話せたなら。

言葉が違うせいで儚く散った恋愛。

見た目の違いより
文化の違いより

なにより言葉の違いが一番大きいのだと知った。

「俺は逃げるように日本に来了。加奈の話す言葉を…喋りたかった」
「うん…」

「去年までいた学校にも気になる子がいて、その子も俺が好きだと言った」

新しく出来た好きな人、日本人

けど女の子の親は猛反対したという。

ジョンが日本語を話せても、もし女の子がイギリスに行ったら英語を話せない。

世界的規模の恋愛なんて所詮無理なんだ、と。

ジョンはなにも言えなかった。

むしろ、英語を話す人を好きにならなかった自分が悪いのだと、自身を責めたのだと。

その子とはジョンから別れを切り出した。

転入した理由はその子との別れではなく偶然のものだったけれど、

忘れるには丁度良いと、ジョンは弱弱しく笑う。

「…今日大学の話をしたよな」

「え…うん」

「高校卒業したら…英語を話す人だけがいる国へ行きたい…なんて、バカみたいだけどそう望んでる」

あたしが悩みを話してと言った。

あたしが支えてあげたいと思った。

けれど

「…あたし英語話せるよ」

けれど

「ああ、そうだな。美園は英語上手いよな」

「だったら、あたしじゃダメなの？」

けれど

そんな話をされたら、あたし自身がジョンを好きでいられなくなってしまう。

2回も日本人を好きになったジョン。

どうしてあたしじゃないんだろう。

もっとはやく…

せめて去年一昨年出会ってれば、幸せになれた。

「あたしジョンが好き。好きだよ」

「…ごめん」

ジョンはうつむいたまま一言そう言った。

「…あたしが日本人だからダメなの？」

あたしの問いかけに応答しない様子を見て、肯定しているのだと分かる。

ブロンドの髪が目映る。

どうしてあたしの髪は黒いの。

どうしてあたしの目は茶色いの。

どうしてアジア人の顔をしているの。

どうして日本に生まれたの…

「だって！英語話せれば良いんでしょ？！あたし英語くらい話せるし、きつとそんな事故は起きないし両親に言葉の違いで反対されたりしない…！！」

違う

違う

違うんだよね

分かってるの

分かってるんだよ、ジョン

あたしが英語話せるとか、そんなのはどうでも良い。

事故が起きなくても
反対されなくても

あたしじゃダメなんだって

分かってる…

「…っ…」

涙が溢れる。

ジョンはあたしが泣いているのに気づき顔をあげ、椅子から立ち上がる。

そして座ってるあたしのところに来て、ひざまづきながらあたしの手を握った。

「美園…」

あたしの手を握るジョンの手は、カタカタと震えている。

「俺、美園のこと好きだけど…でも…」

ジョンの言葉にいつそう涙が出てしまう。

「ジョン…良い。ありがとう…」

涙声のあたしの言葉にジョンは、涙をこぼした。

あたしの手に1粒2粒と、ジョンの涙が落ちた。

「ごめん、美園……ごめんっ…」

分かっている

いくら好きあっても

言われなき境界があつて

世界的規模の恋愛は難しいんだって。

特にジョンのような過去を持つ人には：

けれど

こんなに切ない気持ちは初めて。

今までにも失恋くらいしたことはあったけど、こんなに悲しいことはなかった。

国が違う

たったそれだけのことで、こんなにも切ない思いをするなんて。

どうしてあたしは日本人でジョンはイギリス人なんだろう。

どうして日本は日本語でイギリスは英語なんだろう。

せめて同じ言葉を話せたなら…

好きだと

アイシテルと

どんなに叫んでも叶わない思い。

一生に一度の恋だと思った。

もうこんなに愛せる人は、この先いないだろうって、本気で思った。

でも

後悔はしていない。

ジョンを好きになれて良かったと思う。

「ほんとに行くの？ジョン」

冬、空港。

今日はジョンが旅立つ日。

「ああ。ごめんな美園」

「分かってるなら時々帰ってきてよ！」

ジョンはイギリスに戻ることに決めた。

ずーっと連絡を取っていた友人に、大学は向こうの大学に行くよう強く勧められてたみたい。

でも、たぶんそれだけじゃない。

「絶対帰ってくるよ。…お互い幸せになろうな」

ジョンがスツと手を差し出してきた。

あたしはそれをギュツと握る。

「ブロンド美人じゃなきゃ許さないから」

笑ってそう言うと、ジョンは「了解」と子供っぽく笑った。

あたしたちはアイシアッテイル

けれど、一緒にいたらいつまでたってもお互い好きな人ができない。

離れるのはこれほどまでに寂しくて辛いけれど

いつか笑って「あのときは…」って話せるようになりたい。

だから、さよならなんて言わないよ。

「じゃ、行ってきます」

一生に一度の恋

これよりもっともっと最高の恋をして

上を向いて歩いていきたいの。

I
w
a
s
i
n
l
o
v
e
w
i
t
h
y
o
u
.
.

あたし、きつともっと強くなれる。

f
i
n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4610e/>

アイシテル

2010年10月11日12時57分発行